

水谷誠氏 博士（文学）学位請求論文  
論文題目「『集韻』系韻書の研究」  
審査報告要旨

『集韻』とは11世紀前期北宋時代に編纂された「韻書」すなわち一種の発音辞典である。従来、中国語音韻学史のうえで、隋の『切韻』（601年）の増補版『大宋重修広韻』（1008年、以下『広韻』と略称）に比べ、扱われることが相対的に少なかったが、実は北宋の古典学や科学の問題にも直接関連する重要な辞書である。宋代中国語の音韻を知る手がかりを提供してくれるという意味からも注目される。

本論文は第一部『礼部韻略』（第1～6章）と第二部『集韻』（第7～12章）とからなる。『礼部韻略』とは科挙に際して実際に持込を許可された『集韻』系の小型辞書である。『大宋重修広韻』改訂の作業から『礼部韻略』（1037年）と『集韻』（1039年）が生まれたこともあって、両書には共通の要素もあるが、相違点も多い。たとえば義注に関して両書は同じ資料群をもとにしていると想定されるにも関わらず、『集韻』では、一部の書物を除き、義注に引いた訓詁に書名を記すことはなく、また又音（同字異音）の注記もない。これとは逆に、『礼部韻略』では比較的丁寧に書名や又音を記す。このような点を始めとするきめ細かい調査分析の結果、『礼部韻略』が『集韻』の単なるダイジェスト版ではなく、両書が複雑に関係しあいながら成立したことを解明した点が高く評価される。

章ごとに見ていくと、第1章では『礼部韻略』での避諱（皇帝の名を避けること）による小韻（音節）削除の問題が扱われている。『礼部韻略』は皇帝の代替わりごとに改訂されるため、避諱の状況が刊行時期推定の手がかりとなるのである。第2章と第3章は、真福寺本『礼部韻略』に関する文献学的研究。真福寺本はその存在こそ知られていたが、本格的な研究は本論文が初めてである。今回の研究によって真福寺本が『礼部韻略』の当初の姿にかなり近いことが明らかになり、第1章および第4章の考証と相俟って、『礼部韻略』の現存主要版本すなわち真福寺本、『附釈文互注礼部韻略』、『増修互注礼部韻略』の正確な位置づけが可能となった。第5章は『礼部韻略』の義注と『集韻』の義注が同じ資料群をもとにしていることを考証したものの。

第6章と第7章は音韻史研究に直接関連するもの。第6章では、各大韻（韻目）の中の各小韻（音節）が、その声母（音節始めの子音）の順番に関して、もとは『広韻』のようにほぼ無秩序に並んでいたものを、『礼部韻略』や『集韻』が韻図（一種の発音図表）の手法に基づく秩序によって並べ替えたことについて考証。第7章は中古音で開合韻と再構される真韻・諄韻に所属する字が、『広韻』から『集韻』に至り、別の観点から編成し直されていることについて比較考察した。『礼部韻略』がちょうど『広韻』から『集韻』に至る過渡的様相を呈していることも明らかにされる。ただし、このような変化がなぜ行われたかについての音韻史研究の立場からの考察が少ないことが惜まれる。

第8章以下は、主に、『広韻』から『集韻』に至って増補された約二万八千の標出字（親

字)の資料的來源を探ったもの。歴代の辞書における収録字の増加の問題は中国辞書史研究の重要なテーマの一つである。第8章は『集韻』とほぼ同時期に出版された『群經音辨』を基準に『集韻』を考察したもの。原稿段階の『群經音辨』が『集韻』の材料の一つであることは付載された勅牒からわかっていたが、今回の研究により『群經音辨』から『集韻』に増補された字は意外に少ないことが判明した。

第9章と第10章では民国時代の黄侃以来の「『集韻』の増補字は多く隋の『經典釈文』に由来する」という説を具体的に検証。増補の二万八千字のうち、『經典釈文』に由来するものが四千余字あること、また『集韻』編纂時の『經典釈文』の利用が二度に涉ること、つまり増加部分が二層に分かれることが確認された。このような発見も歴大な作業があって始めて成しえたものである。付録の「『広韻』未収『經典釈文』由来『集韻』所載字索引表」はそのような作業の一成果である。これらにより『經典釈文』を経由して六朝時代の古典解釈学の特殊な字音が相当多数『集韻』に流れ込んだことが実証されたわけで、なぜ『広韻』刊行後あまり間をおかずに『集韻』編纂が計画されたのかという問題を考える上でも重要な手がかりを提供したと言えよう。

第11章は、『集韻』の義注から反対に現行本『經典釈文』に散佚部分があることがわかることを幾つかの例により検証した。第12章は『広韻』と『集韻』の間に刊行された字書『大広益会玉篇』を分析。『大広益会玉篇』自体の増補部分から『集韻』が三千以上の字を採録したことがわかった。

以上のとおり、本論文は『集韻』系韻書に関する文献学研究としては今のところ最も精密で周到なものだと思われる。水谷氏は本論文に先立ち関連する二種の索引すなわち『増修互註礼部韻略索引』『群經音辨索引』を刊行している。本論文が、それらの索引と相俟って、今後『集韻』系韻書の研究ひいては宋代音韻史研究を目指す者の指針としての必読文献となるであろうことは確実である。よって本論文は博士(文学)早稲田大学の学位を授与される価値を十分に有すると判断する。

2004年12月4日

主任審査委員 早稲田大学教授

早稲田大学教授

前早稲田大学特任教授・東京大学名誉教授

東京都立大学教授

古屋 昭弘

稲畑耕一郎

平山 久雄

佐藤 進